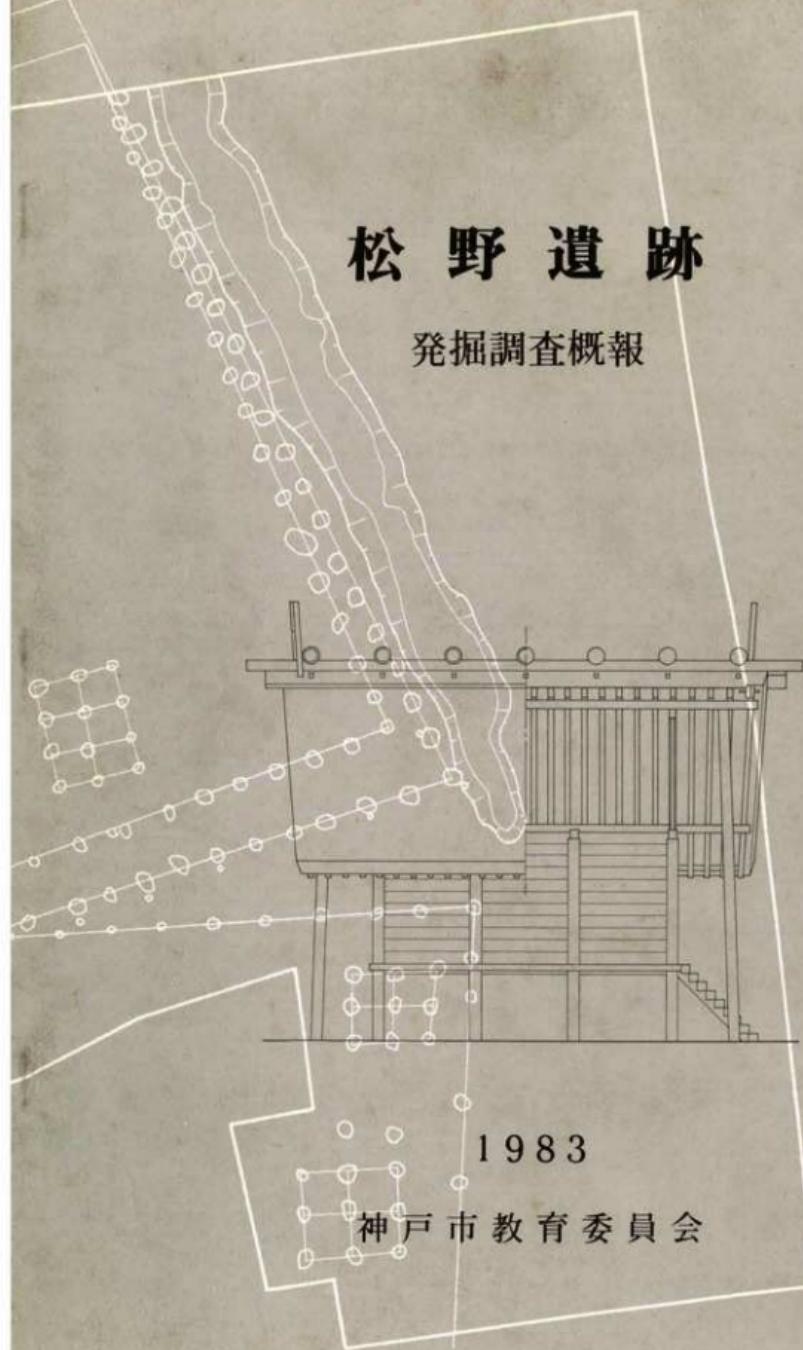


松野遺跡

発掘調査概報



1983
神戸市教育委員会



fig.1 第1トレーニチ全景

序

六甲連山の南側は、瀬戸内海に面し気候が温暖で、海の幸山の幸にめぐまれた七地であったと考えられます。その証しとして、数多くの遺跡が存在しています。

しかし、早くから市街化されたこの地域の埋蔵文化財は、私たちの目に触れることはありませんでした。そのため、市街地の再開発に伴う調査で、新しい遺跡の発見が相続いでいます。ここに報告する松野遺跡もその一つです。

松野遺跡からは、古墳時代の柵列群と掘立柱建物址群とが検出され、全国的にも発見例が少ない造構で貴重な発見といえます。本市の歴史はもとより他地域の古墳時代の社会の歴史を解明するうえでも重要な資料になるものと思われます。

発掘調査後、一部は建設のために消滅しましたが、大半の建物址群は、埋め戻され地下に保存されております。遺跡は発掘調査地以外に広がっており、この遺跡の性格、規模等を明確にしていくよう努力いたしますので皆様の御理解と御協力を賜りますようお願いします。

本書の刊行が、地域の歴史を理解するうえでお役に立てば幸いです。調査及び本書の刊行に御協力頂きました関係各位に厚く感謝いたします。

昭和58年3月31日

神戸市教育委員会

教育長 山本治郎

目 次

序 文

例 言

第Ⅰ章 立地及び環境.....	1
第Ⅱ章 調査経過.....	6
第Ⅲ章 調査の概要.....	8
第1節 遺構の概要.....	8
第2節 遺物の概要.....	20
第Ⅳ章まとめ.....	23
松野遺跡の高床建築について(宮本長二郎).....	24
松野遺跡より出土した杭材の樹種について(松田隆嗣).....	28

図 版

- PL. 1 第1トレンチ平面図
PL. 2 遺物実測図（I）
PL. 3 遺物実測図（II）
PL. 4 遺物実測図（III）
PL. 5 遺物実測図（IV）
PL. 6 出土遺物（I）
PL. 7 出土遺物（II）

- PL. 8 出土遺物（III）
PL. 9 出土遺物（IV）
PL. 10 遺構（I）
PL. 11 遺構（II）
PL. 12 遺構（III）
PL. 13 遺構（IV）
PL. 14 遺構（V）

捕 図

- fig. 1 第1トレンチ全景
fig. 2 調査地遠景（南東から）
fig. 3 周辺跡分布地図
fig. 4 トレンチ配置図
fig. 5 SK17遺物出土状況
fig. 6 檻南辺「門」推定付近
fig. 7 第1次櫛群
fig. 8 第2次櫛群
fig. 9 SB01（西から）
fig. 10 SB01平面図及び断面図
fig. 11 SB02（東から）
fig. 12 SB02平面図及び断面図
fig. 13 SB03（南から）
fig. 14 SB03平面図及び断面図
fig. 15 SB04（北から）

- fig. 16 SB04平面図及び断面図
fig. 17 SB05（北から）
fig. 18 SB05平面図及び断面図
fig. 19 SB06（北から）
fig. 20 SB06平面図及び断面図
fig. 21 SB08（西から）
fig. 22 SB08平面図
fig. 23 SD02遺物出土状況（北から）
fig. 24 第2トレンチ全景（西から）
fig. 25 第3トレンチ全景（東から）
fig. 26 市内出土第1期須恵器
fig. 27 SB05復元図
fig. 28 SB06復元図
fig. 29 樹種写真

例　　言

1. 本書は、神戸市住宅局施工の市営松野住宅建設事業に伴って実施した発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は、神戸市教育委員会文化財課が行い、同課学芸員の西岡巧次、渡辺伸行、菅本宏明、口野博史、千種浩が担当した。
　第1次調査（S56.10.26～S57.1.31）
　第2次調査（S57.2.3～S57.2.28）
　第3次調査（S57.6.10～S57.6.25）
3. 本書の作成は千種浩が担当した。
4. 遺物の写真は、同課学芸員丸山潔が担当し、整理作業には、中納久美代（奈良大學生）・田中誠一（花園大学生）・谷正俊（立命館大学生）の協力を得た。
5. 建築史的見地から奈良国立文化財研究所宮本長二郎氏の玉稿をいただき、また、元興寺文化財研究所松田隆嗣氏からは、柱材の材質に関する詳細な報告を得た。
6. 出土須恵器については、大谷女子大学専任講師中村浩氏の御教示を受けた。
7. 調査にあたっては、同市文化財専門委員会の野地脩左・小林行雄・横上重光の三先生に指導を受け、併せて奈良国立文化財研究所の先生方の指導・助言を得た。
8. 調査・整理作業については、中西靖、藤本雅一、小池比佐子、中嶋三恵子、渡辺千秋、田中律子等の学生諸君の協力があった。

第一章 立地及び環境

1. 立 地

松野遺跡は、六甲山系と瀬戸内海の間を東西に細長く広がる平野部の西端付近に位置している。

この付近は、六甲山系から発する妙法寺川、茹藪川などの河川によって扇状地または緩扇状地性低地が、形成されている。松野遺跡は、この緩扇状地性低地のなかの南北方向の微高地上に立地している。遺構面の標高は約8mで、調査地から現海岸線（長田港）までの距離は、1km程度である。

現況

松野遺跡の所在する長田区は、東灘区以西の埋め立て工業地帯の西端に位置しており、地場産業としてケミカルシューズを代表とするゴム製品の工場を有し、長く神戸の産業を支えている。

遺跡周辺もゴム製品関係の工場が立ち並び、住居が混在しており戦後の急速な成長を物語っている。しかし一方では、ドーナツ化現象などの都市問題を内包している。

近代以降の急激な開発によって消滅、半壊された地域の歴史事が、再開発によってよみがえるという皮肉な可能性をもつ地域である。



fig.2 調査地遠景(南東から)

2. 周辺遺跡

当地域は、「万葉集」などでも詠まれている「須磨の關」に当たる地域で、摂津国の西端の八部郡に属している。八部郡は現在の兵庫区、長田区、須磨区に相当する。以下、松野遺跡を中心とする地域の諸遺跡を概観してみる。

旧石器・縄文時代

当該期については、ほとんどが表探資料に依っており、遺跡の詳細について不明な点が多い。

丘陵上の会下山遺跡からは、ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代に入つて、早期に属する押型文土器が境川遺跡(須磨浦公園内、標高約40m付近)で採集されている。中期については、名倉遺跡の土器片が直良信夫氏によって紹介されている。

晩期の遺物は、地下鉄の立会調査によって発見された五番町遺跡^{註4}で、滋賀里Ⅲ式と晩期最終末に比定される十器が出土している。

弥生時代

前期に関する遺跡としては、楠・荒田町遺跡^{註5}が著名である。地下鉄建設に伴う調査によって発見され、発掘調査の結果、弥生時代前期～平安時代の遺跡であることが確認されている。前期末～中期初頭の貯蔵穴が30基検出されている。他地方からの搬入品と考えられる土器も多く出土している。

中期に至ると、丘陵・縁辺部に遺跡が点在している。しかし、これらの発見が1930年代前後と早い時期であったこともあって、遺跡の規模や内容は、まだ明確にはなっていない。兵庫区内の東山遺跡^{註6}は、畿内第Ⅲ様式の基本資料として紹介されている遺跡である。同じく河原遺跡では、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の壺形土器の内から40個近い貝輪が出土している。熊野遺跡では、住居址と思われる堅穴造構から、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器、石鎌等が採集されている。

後期に属する遺跡としては、長田区内の長田神社境内遺跡、長田神社南遺跡、神楽町遺跡などが知られている。いずれも茹藻川流域^{註7}に属している。

古墳時代以降

妙法寺川から漆川流域間に、前期古墳の得能山古墳、会下山二本松古墳、夢野丸山古墳が点在する。中期の念佛山古墳は、茹藻川河口付近に立地していた古墳である。後期に属するものは、茹藻川の河口付近に櫟塚、雀塚など横穴式石室を採用しない古墳が群集していた。この上流の池田広町、大塚町に約10基程度の横穴式石室が確認されているが、現存するものは少ない。

夢野丸山古墳^{註8}は、漆川右岸丘陵上(標高約110m)に立地した古墳で、堅穴式石室が一基検出されている。墓址は、約12m×3mの長大なものである。吾作銘神祇鏡1面、銅鏡31本、鐵鏡数10本、直刀7振、鉄劍6振、直刀鎌、有袋鉄斧、手鎌、鉢形鉄製品各1個体が出土している。

会下山二本松古墳は、茹藻川左岸丘陵上(標高約85m)に立地し円墳として報告されている。堅穴式石室からは、内行花文鏡1面、

琴柱形石製品、直刀、鉄劍、刀子、板状鉄斧、直刀鎌、鉈が各1個体、有袋鉄斧が2個体、鉄鎌が複数出土している。

得能山古墳は、妙法寺川右岸丘陵(標高約100m)に立地し、墳形は円墳とされており、竪穴式石室からは、半円方形帶神獸鏡1面、四葉座鉢式内行花文鏡1面、鉄刀1振が出土している。

上記の3古墳は、丘陵頂部に立地し、円墳と推定され、長大な竪穴式石室を内部主体として採用し、同時期に比定されるなど、共通する部分が多い。しかし、副葬品のセット関係は、若干異なるようである。

中期初頭に属する念仏山古墳は、茹藻川河口付近に立地する推定全長約180mの前方後円墳である。鱗付円筒埴輪片の出土が知られているが、現状では、市街地に没している。

後期古墳については、その多くがすでに消滅、半壊状態にあり、群構成等については、不明な点が多い。しかし、茹藻川河口付近の両岸に4~5基以上存在する古墳群は、海岸線から1km以内で、標高も約4m前後という低地にあり、他の六甲南麓の後期古墳とはまったく異なる存在である。最も異なる点は、雀塚の如く、木棺直葬と推測される主体部を採用している点である。主体部からは、金環3個、ガラス切小玉1個(直刀)1振が出土している。

これら河口付近の古墳群は、松野遺跡と時間的、空間的に接する遺跡であり、この両者には、何らかの関係が存在していたものと思われる。

古墳以外の遺跡としては、長田区神楽町遺跡で、5世紀後半の遺物が数点出土している。遺構を伴っていないが、周辺に集落の存在が予想される。

兵庫区の房工寺廃寺(室内遺跡)は、八部都衛推定地とされており、瓦類も出土しているが、それを裏付ける遺構は検出されていない。

平安時代の遺跡としては、神楽町遺跡で、縁釉陶器、墨書き器等が出上しているが、建物址等は、検出されていない。会下山二本松古墳の墳丘からは、平安時代に属する絆筒が出土している。

平安時代末頃、この地域は、平清盛により、大輪田泊が整備され福原京が計画されている。これに関する遺跡は、市街地に重複していることもあるが、その姿は、まだ解明されていない。

松野遺跡の周辺では、現段階の発掘調査の成果等からは、櫛に開まれた初期の掘立柱建物址群を生みだした直接的な原動力となるも

奈良時代以降

のは、見い出すことができない。まさに、忽然と建物群が出現していった感がある。

註

- ① 「おおむかしの神戸展」神戸市立考古館（第8回特別展）1976
- ② 註1と同じ
- ③ 高良信夫「神戸市名倉町出土の縄文式土器片」『近畿古文化叢考』1943
- ④ 「楠・荒田遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1980
- ⑤ 註4と同じ
- ⑥ 小林行雄「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」『考古学』第4巻4号 1933
- ⑦ 深田耕作「貝輪を容れた素焼き」『人類学雑誌』第36巻第8号 1921、小林行雄「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」『考古学』第4巻4号 1933
- ⑧ 註6と同じ
- ⑨ 太田陸郎「神戸市の史前遺跡」『考古学』第3巻第2号 1932、『長田神社造営史』長田神社 1926
- ⑩ 註4と同じ
- ⑪ 地下鉄工事に伴う発掘調査によってその内容が知られた。
- ⑫ 梅原木治「神戸市丸山古墳と発見の遺物」『考古学雑誌』第14巻5号 1923、梅原木治「兵庫県下に於ける古式古墳の調査」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二編 1924
- ⑬ 長馬悦藏・吉井太郎・渡部多仲「会下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記物調査報告書』第五編 1928
当古墳の内部構造に関しては、小林行雄「堅穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』京都大学 1941 以降多くの考察が加えられている。
- ⑭ 梅原木治「神戸市板宿得能山古墳の調査」『歴史と地理』第14巻4号 1924
森本六爾「得能山古墳」『考古学雑誌』第14巻3号 1924
梅原木治「神戸市板宿得能山」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』2 1925
- ⑮ 太田陸郎「有蟻埴輪円筒」『考古学』第2巻4号 1931、喜谷美宣「市街地に消えた大前方後円墳」（神戸の考古学21）『雪』第30巻9号 神戸市防火協会連絡協議会 1978
- ⑯ 福原潜次郎「神戸市西尻池村発見の古墳に就きて」『考古界』第6篇第1号 1906

fig.3 周辺遺跡分布図

- 1 松野遺跡
- 2 得能山古墳
- 3 念仏山古墳
- 4 会下山二本松古墳
- 5 夢野丸山古墳
- 6 神楽町遺跡
- 7 雀塚
- 8 林山町古窯址
- 9 室内遺跡
- 10 長田神社南遺跡
- 11 五番町遺跡
- 12 長田神社遺跡
- 13 名倉町遺跡
- 14 熊野遺跡
- 15 河原遺跡
- 16 東山遺跡



第Ⅱ章 調査経過

調査以前

国鉄新長田駅周辺の整備の核としてジョイプラザ（商、住空間を一体とした高層建築）が建設され、さらに近年長田商店街の再開発が進むという周辺の状況がある。

1. 調査の契機

かつての市立神戸工業高校（夜間は大和田工業高校）が名谷に移転し、その跡地に規模を縮小して長田工業高校が建設されたのが昭和54年であった。この神戸工高的グランド跡地が、住宅局の所管となり、市営住宅の建設が予定された。

56年8月6日、住宅局からの依頼により、教育委員会が重機による試掘を行なった。

その結果、弥生式土器の小片（木葉文土器）が出土した。

木葉文土器は、弥生時代前期にのみ見られる特徴的な遺物であり、市内では、大歳山遺跡、吉田遺跡で発見されているが、県下でもその出土例は極めて少ない。

さいど、昭和56年9月10日～18日に遺構の存在の有無とその広がりを確認するための調査を行なった。この結果、古墳時代中期末から後期初頭のピットと土塙を検出した。このデータを基に住宅局と協議した結果、建物が建設するために、遺構面が消滅する範囲について全面発掘調査することを決定した。

2. 第1次調査

第1次調査は、住居棟予定地に第1トレンチ、集会所予定地に第2トレンチを設定し、調査を開始した。調査前の予想に反して、第1トレンチから古墳時代中期末から後期初頭の溝・掘立柱建物址群、柵址等が検出され、弥生時代の遺構は、後期の井戸が1基検出された。

調査によって、柵の西辺・北辺と南辺の一部と柵内に3棟の掘立柱建物址が検出された。しかし、柵内を完掘しておらず、建物の配置の全容を把握することはできなかった。

この時点で、遺跡の正確な位置を求めるために、座標軸の測定を行い、第1トレンチ内にX=-149.1310、Y=+74.310のポイントを設定した。

5世紀末～6世紀初頭の掘立柱建物址群は、全国でもその検出例は少なく、柵に囲まれた建物群については、類例がなく、当遺跡が極めて重要な意義をもつと判断された。また当市文化財専門委員の

柵内完掘をめぐって

先生方、奈良国立文化財研究所の指導のもとに、さいど、住宅局と協議した結果、非消滅区域についても発掘調査を実施することに決定した。

3. 第2次調査

住宅局の理解と協力を得て、第2次調査を実施し、柵内を完掘した。この区域は、駐輪場や、広場としての空間であり、消滅を前提としないために、遺跡保護の面から、遺構を掘りきらず、柱掘り方と柱痕の検出を最終目的とした。この調査により、柵の規模と建物配置を確定することができた。

遺跡の保護

第2次調査終了後、非消滅部分について埋め戻しを実施した。約1200m²の全面に真砂土を厚さ約0.5m、腐食土を厚さ0.6mの土でおおい遺構の保護を計った。これによって柵内の建物群と柵の北辺等が保存されている。SB01、02と柵南辺については、設計変更が不可能であったため消滅した。

4. 第3次調査

当初からの予定通り、ポンプ場予定地について調査を実施したが、柵外には、顯著な遺構を発見することはできなかった。

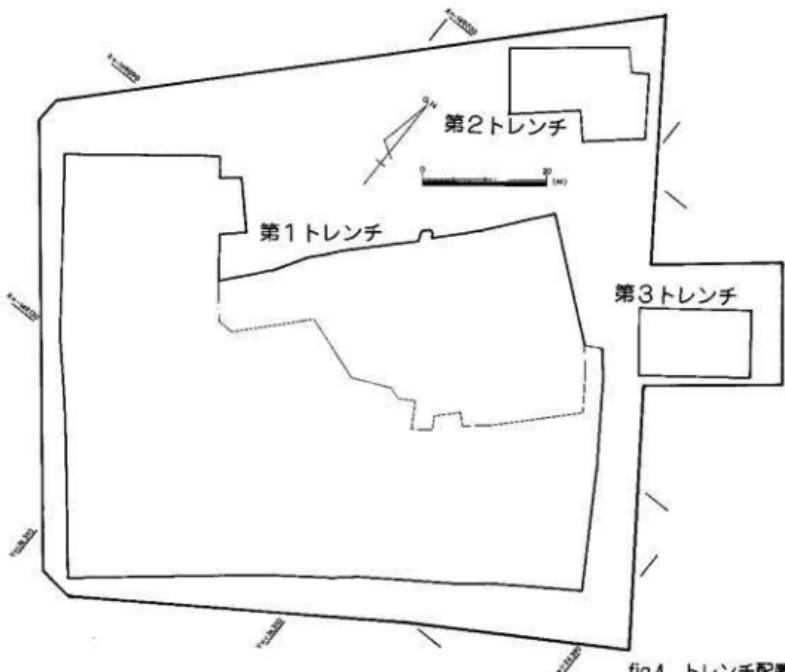


fig.4 トレンチ配置図

第Ⅲ章 調査の概要

1. 遺構の概要

遺構面

各トレンチの包含層は、削平を受けているために薄く、5~10cm程度の厚さで、遺物の包含量は少ない。

同一遺構面で弥生時代後期、古墳時代（中期後半～後期初頭）の遺構を検出した。これは、古墳時代に、弥生時代後期の生活面が、削平されたことによるものである。

第1トレンチの遺構面は、砂礫層の部分と青灰色泥砂、灰黃色泥砂の部分に大きくわかれれる。砂礫層には摩滅した弥生時代前期の遺物を若干含んでいることから、弥生時代後期以前の流れ堆積によるものであると思われる。

遺構面は南に向って、ゆるやかに低くなっている。また東西方向についてもSB05、06付近を頂点としてゆるやかに東西へ低くなっている。

おそらく南北に伸びる微高地の頂部に柵群を形成していったのであろう。

i) 第1トレンチ

a 弥生時代

遺構としては、土塙6基、井戸1基を検出した。それぞれ、弥生時代第V様式に属する。

土塙

トレンチの東半で、土塙が5基検出された。いずれも不整形な橢円形または隅丸方形を呈している。SK15、16、19からは、まとまった遺物が出土している。各土塙の遺物は、底から浮いた状態で出土している。

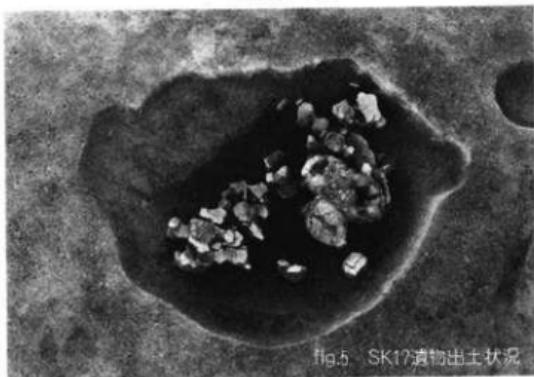


図8.5 SK17遺物出土状況

SK15では、變形土器3、壺形の土器1などが出土している。SK16からは、變形土器3、大型鉢形土器1、高杯形土器1が出土している。

他の土塙でも變形土器の出土する割合がかなり高い。

トレンチ西壁付近で井戸を1基検出した。井戸内より第V様式に属する鉢形土器及び高杯形土器が出土している。規模は長

径1.7m、深さ1.3mで、底は平坦である。

これら土塙や井戸が検出されたにもかかわらず、竪穴式住居址は確認できなかった。弥生時代の遺構面は明らかに削平されており、竪穴式住居も存在していたと想定されるが、古墳時代の整地の際に消滅してしまったと推定される。

b 古墳時代

柵4条以上、溝2条、土塙10基以上、竪穴式住居址1棟、掘立柱建物址7棟を検出した。

柵 柵の柱掘り方内からは、須恵器、土師器、弥生式土器が出土している。出土量は少なく、時期差について言及し得る資料は極めて微量である。柱掘り方の切り合い関係から、二期間に分かれると考えている。

地上の構造については、あくまでも推定の域をでないが、柱間に横木を2~3段めぐらすのではないかと推定している。

なぜなら、柱通りが悪く、板べい状のものを想定することは困難であり、また、柱掘り方が深さ0.6~0.9mに達し、柱材も直径0.3m前後としっかりしており、ある程度の重量に堪える構造であったと思われるからである。

SD01の中位付近の深さから木材（長さ約1.2m 直径0.2m程度）が出土しており、SA01の横木の一部であった可能性がある。

切り合い SA01、02は、西辺で掘り方が切り合っており、この関係からSA01がSA02に先行することがわかる。しかし、同時存在の可能性も完全には否定できない。

接続 SA03は、SA01の北辺にとりついており、切り合い関係はない。SA01北辺の東半部と同時存在である可能性が高い。



fig.6 楼南辺「門」推定付近

「入口」 SA02南辺で不整合がみられ、その幅は約1.8mである。この付近で柱穴が重複しており、簡単な「門」を想定することができる。

SA01の北辺、東端の柱間距離が約3.5mと他の1.7~2.0mよりも大幅に広くなっている。この部分が、SA01、02の空間とSA03の空間をつないでいたと推定される。

「支柱」 SA01の東辺内側（西側）、北辺外側（北側）で、1本間隔に直徑0.2~0.3mの柱穴が規則的に検出された。深さは0.15~0.2mで、上位が柵の柱に向かって斜めに掘りこまれている。

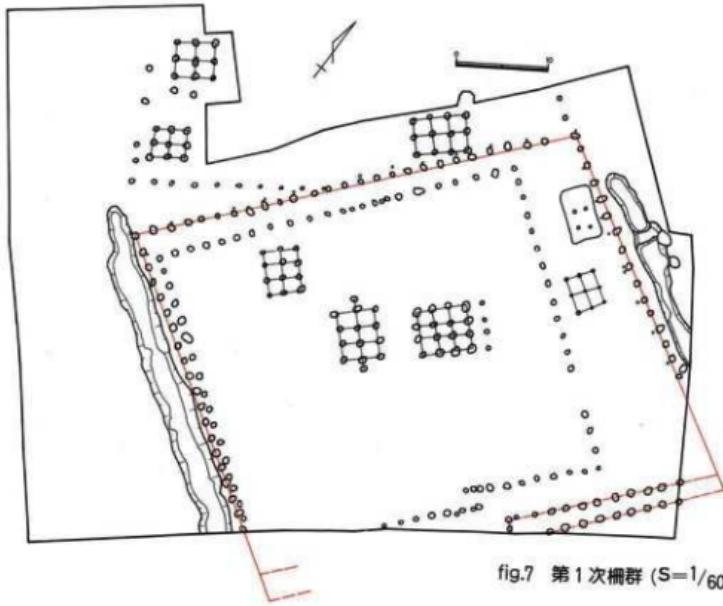


fig.7 第1次柵群 ($S=1/600$)

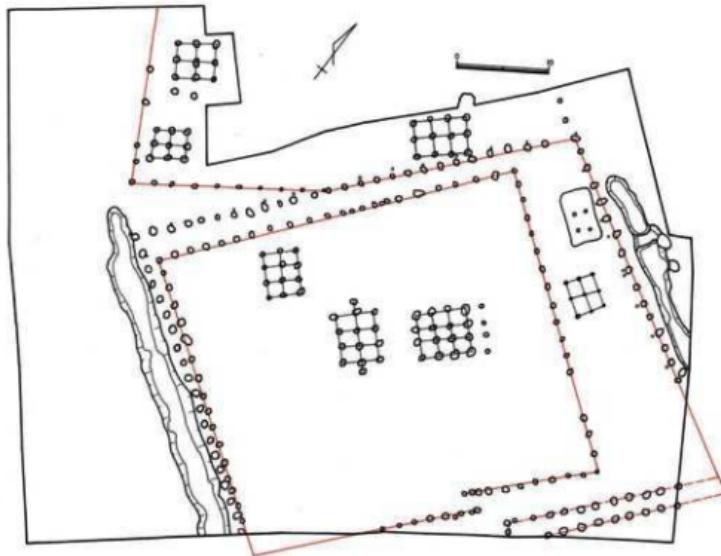


fig.8 第2次柵群 ($S=1/600$)

SB01



fig.9 SB01(西かる)

2間×2間の縦柱の南北棟。主軸は南北から約35度西に振っている。南北が3間とも考えられるが、南東隅の柱穴は精査の繰返しにもかかわらず検出されなかった。さらに3間目の2柱穴については、その東西軸方向が他の軸方向に対して少しずれている。

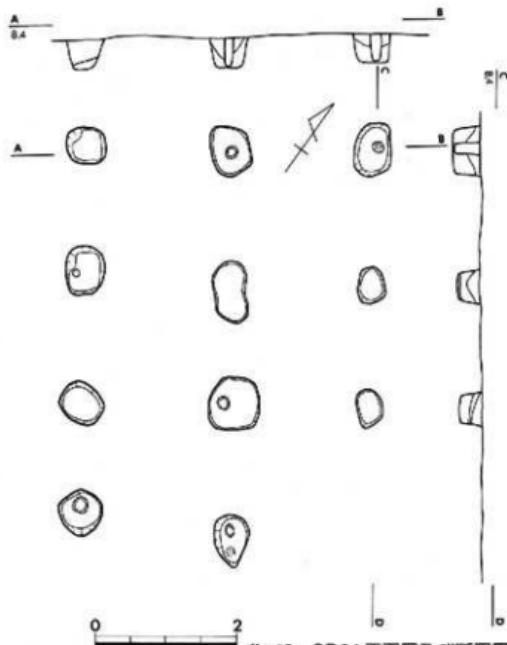


fig.10 SB01平面図及び断面図

これらの点からSB01が2間×3間であったとは判断し難い。2間×2間とした場合、その規模は南北3.6~3.7m、東西4.1~4.2mとなる。

掘り方は、長辺0.5~0.6mの方形と思われるが、検出面では、いびつな形を呈するものがある。深さは、約0.3~0.6mで底が平になるものと、丸くロート状になるものがある。柱痕は、直径は約0.2mである。

東西の柱間距離は2.0~2.2mで、南北は1.7~2.0mを測る。

柱掘り方からは、須恵器、土師器などが出土しているが、明確に時期を限定できる資料は、得られていない。

SB02



fig.11 SB02(東から)

2間×2間の総柱の南北棟。主軸は、南北から約2.8度30分西に振っている。規模は南北3.0m、東西3.7m。東西の柱間距離は1.7m～1.8m、南北は1.4m。東西の柱間距離は1.7m～1.8m、南北は1.4m～1.6mとやや南北方向については開きがある。南西隅の柱穴が若干西方にずれているが、上屋には支障はないと思われる。

柱掘り方のプランは不整合であるが、長軸0.5～0.7m前後の方形

ないしは梢円形を呈していたと推定される。深さは0.4～0.6mでまちまちである。すべての柱穴で柱痕を検出できた。東西方向については柱の通りが悪くなっている。柱痕の直径は0.2m前後である。

柱掘り方から須恵器、土師器の小片が出土している。杯身の形態をみると器高は低く、余り丸味をもたず、受部端部はやや上方を向き比較的長くなっている。

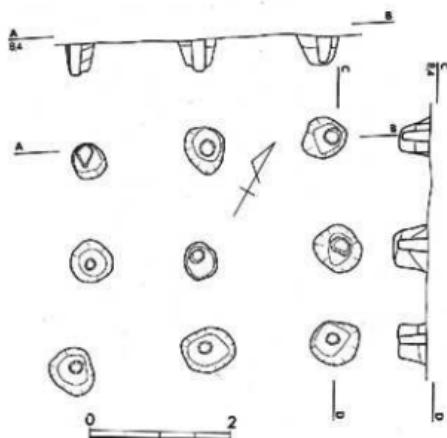


fig.12 SB02平面図及び断面図

SB03

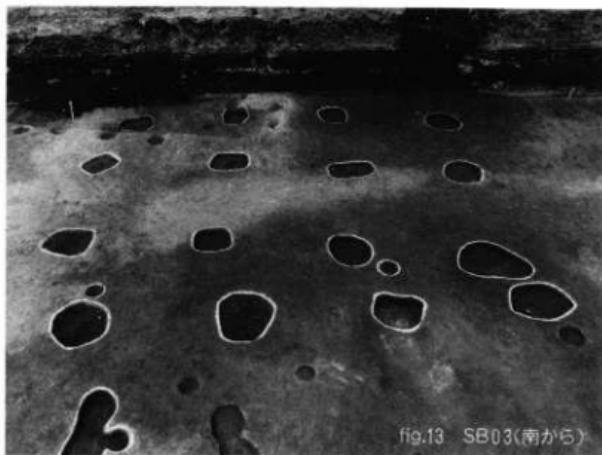


fig.13 SB03(南から)

2間×3間の総柱の東西棟。主軸は、真北から約47度30分東に撮っている。規模は東西約5.7m、南北3.6~3.8mを測る。東西の柱間距離は1.8~2.0m、南北も1.8~2.0mと推定される。双方ともほぼ等間である。

柱掘り方は長辺0.5~0.6mの隅丸長方形または方形であるが、いびつな形を呈する柱穴もある。

同じく2間×3間の大きさを持つSB04、05に比して、規模が大

きく、長軸も東西方向に向いており、性格を異にする建物と考えられる。

SA01の北辺に近接しているが、同時存在を否定する根拠にはなり得ないと思われる。

土師器小片が出士している。

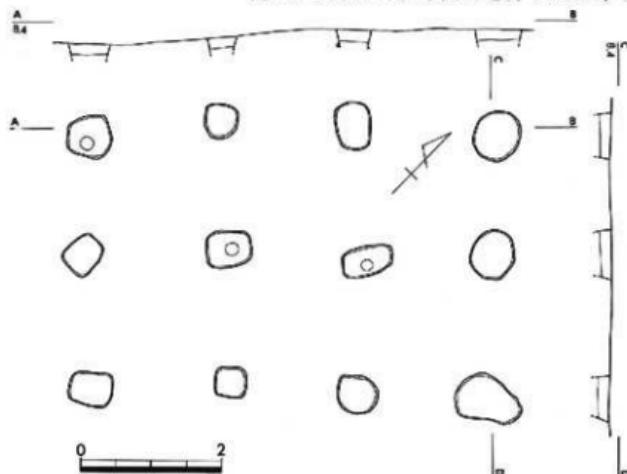


fig.14 SB03平面図及び断面図

SB04

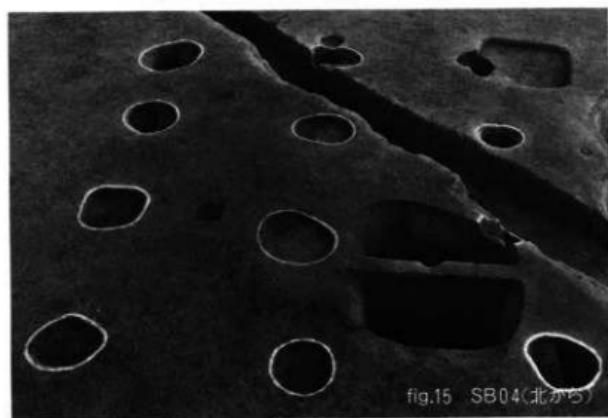


fig.15 SB04(北から)

2間×3間の総柱の南北棟。主軸は真北から45度30分西に振っている。規模は南北約4.7m、東西約3.7mである。

東西の柱間距離は1.7~1.8mで南北は1.4~1.6mを測る。東西の柱間距離がSB02のものとほぼ一致している。

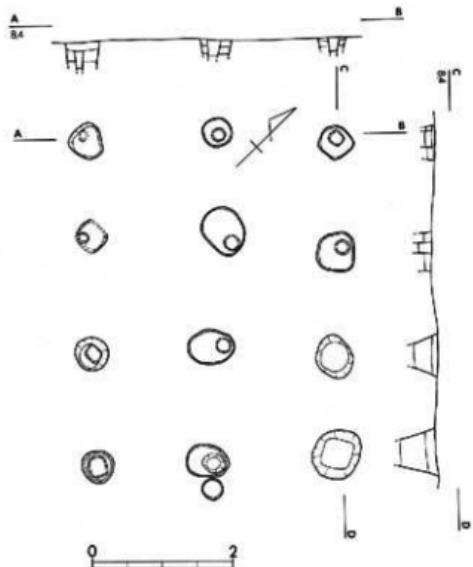


fig.16 SB04平面図及び断面図

柱掘り方は隅丸方形と楕円形のものがあるが、完掘しておらず、断定し難いが下端は方形を呈すると思われる。遺物は、土師器小片が出土している。東西の柱間距離がSB02のものに類似していることから両者を重ね合せてみた。SB04の南端の柱穴列をはずせば、両者の平面プランは、ほぼ合致している。おそらく両者は同一の規格・目的によって建設されたものと思われる。この規格上の対応が柵をはさんで存在する点は、それぞれの建物の性格を考えるうえで、興味深い事実である。

SB05

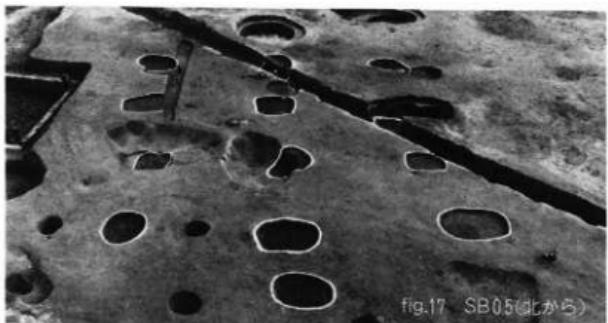


fig.17 SB05(北から)

棟持柱をもつ2間×3間の南北棟。主軸は真北から45度30分西に振っている。

規模は、SB03よりも一回り大きく南北5.1m、東西4.1mを測る。柱間距離は南北で1.5~1.8m、東西2.0~2.1m付近である。掘り

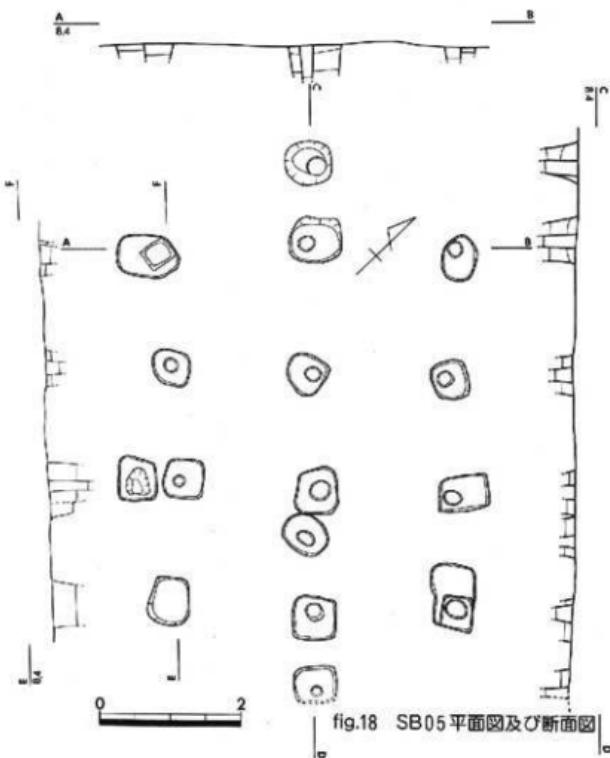


fig.18 SB05平面図及び断面図

方は、一辺0.5~0.6mの方形、長方形と考えられるが、検出面ではいびつな形を呈している。2、3余分な柱穴があるが、建替えによるものではない。柱痕の直径は約0.2m前後である。

梁行から棟持柱までの距離は、南北共に1.1~1.2mである。棟持柱の規模は他の柱穴と変らない。

柱掘り方の埋土からは、須恵器、土師器、弥生式土器の小片が出土している。須恵器は有蓋高杯のつまみ部が出土している。時期を明確に限定する資料ではないが、SD01、02

とほぼ同期とみてよい。

SB04の項で前述したように、SB02とSB04は、柱間距離の一致がみられるが、このSB05も、SB01と柱間距離に関して対応している。

SB06



fig.19 SB06(北から)

主軸の方向のずれから、2棟の建物（a棟、b棟と称する）が重複していると考えられる。

a棟が真北から西へ約47度30分、b棟は西へ約49度30分掘っている。

a棟は、3間×4間の南北5.8～6.0m、東西約7.8mの規模と推定される。b棟に先行するものと思われる。

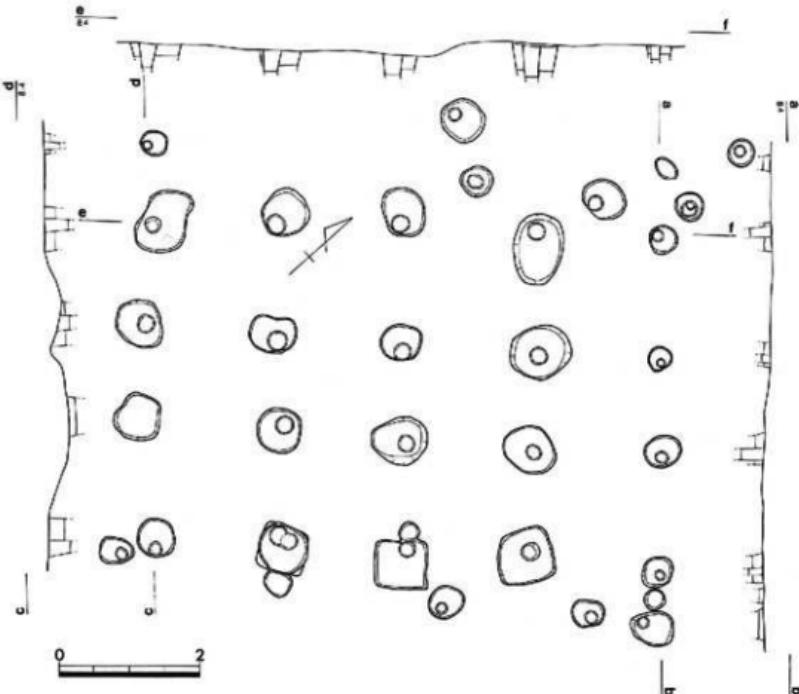
b棟は、3間×3間で長軸を東西方向にとり、東側に規模の小さい柱穴列がとりついている。南北4.5～4.6m、東西5.4～5.5mを測り、東側にとりつく柱穴列を含めると7.2～7.5mの規模になる。

a棟の柱掘り方は、長軸0.4～0.5mの不整形な梢円形を呈している。b棟は長軸約0.4mと、a棟よりも小さく不整形な梢円形、隅丸方形を呈している。遺構が砂質土に掘りこまれているために、柱穴のプランがいびつなっている。柱痕の直径は、約0.2mである。

柱穴からは、須恵器、土師器の小片と摩滅した弥生式土器（第V様式）が出土している。

SB07

2間×2間の縦柱で長軸を南北にとる。柱掘り方は、直径約0.2～0.25mで、他の柱穴よりも小さい。南北3.8m、東西3.0mの規模で、柱間距離はそれぞれ1.8mと1.5mである。



SB08

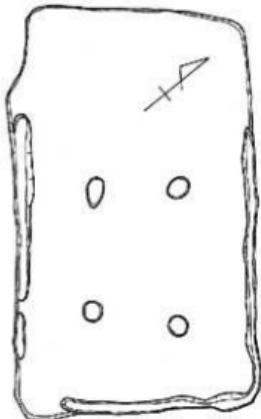


fig.22 SB08 平面図及び断面図

fig.20 SB06 平面図及び断面図

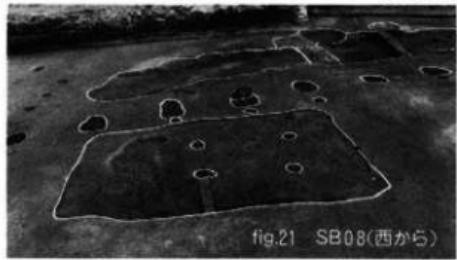


fig.21 SB08(西から)

5.6m × 3.4m の竪穴式住居址である。深さは、4～8cmを測り、浅い周壁溝を確認したが全周していない。0.3m弱の柱掘り方を4ヶ所検出したが、柱痕は見つかっていない。埋土からは須恵器と土師器の小片が若干出土している。

SB08 と他の掘立柱建物址との時間関係は、遺物からは明確にし難いが、SB08 が痕跡程度しか残存していない事等から考えて、掘立柱建物群に若干先行する施設ではないだろうか。

溝

SD01 SA01、02の西辺に接している。幅2.0~3.5mで、長さ37mを確認した。溝の南端は、トレンチ外に伸びているため不明である。南方に向かってゆるやかに下っているが、溝の深さは、0.4~0.7mで部分的に浅くなったり、深くなったりしている。北半付近を中心に遺物が出土している。溝底に接するものは少ない。

SD02 SD01同様に、SA01に並行して走る。幅1.5~3.0mで、長さ21mまで確認した。溝の北端から南へ7.5m付近で「陸橋部」を検出した。上端での幅は、約1mである。若干の盛土をもつが、掘削当初から計画的に両側を掘りこんで、整形している。

「陸橋部」南側から完形品を含む比較的大量の遺物が出土している。SD01同様、溝底には接していない。溝の東半に集中する傾向がある。

SD01、02共に埋土は、黒灰色系の泥土で、滯水していたと考えられる。また、SA01に対応することから、柵および建物群を構築するに当っての区画割りを目的として掘削され、以後排水等の機能を果たし、建物群の終息に従って埋没していったであろう。

土塊 当時期に属するであろう土塊を、10基以上検出したが、いずれも深さが、0.2~0.5m程度と浅く、余り遺物を含んでいない。

SK12が、深さ約1.2mと最も深いが、須恵器、土師器の小片を出土するのみである。SK04では、須恵器有蓋高杯が、1点出土している。またSK02では、粘土塊が出土しているが、性格は、不明である。



図23 SD02 遺物出土状況

ii) 第2トレンチ



fig.24 第2トレンチ全景(西から)

集会所建設予定地に、約170m²のトレンチを設定した。第1トレンチで検出したSA 01東辺を延長したラインの東側（外側）に相当する。

柵列の外側に位置しているためと思われるが、若干のピットと土塙を検出するにとどまった。

iii) 第3トレンチ



fig.25 第3トレンチ全景(東から)

ポンプ場建設予定地の約135m²にトレンチを設定した。第2トレンチと同様に柵址の東側に位置する。包含層は、ほとんど認められず、土塙1基（弥生時代第V様式）と自然流路1条（弥生時代）が検出されたが、柵及び建物群に関連する遺構は、検出されなかった。

2. 遺物の概要

i) 須恵器

包含層が削平されているため、遺物は遺構面直上と遺構内から出土している。大半は遺構埋土内から出土している。総量の約80%は、SD01、02から出土したものである。

須恵器は、出土遺物の約65%を占めている。実測可能な個体数は80個体前後である。杯が圧倒的に多く約65個体に達する。身：蓋の割合は、溝内遺物でみるとかぎり、ほぼ6:4である。

胎土については、Ⅰ)黒色鉱物を含むもの Ⅱ)黒色鉱物と若干のクサリ礫を含むもの Ⅲ)両方とも含まないもの の3種がある。Ⅲ)は少なく、Ⅰ)が大半を占めている。

Ⅰ)耕土・客土から12~13世紀の須恵器塊等が数点出土している。

杯身 杯身A…口縁部径は12cmで、たちあがり端部が若干内傾する。底部は、まだ平坦な感がある。出土個体数は少ない。(25)

杯身B…口縁部径は10.5~11.0cmと、Aに比べて小さくなり、器高は低い。たちあがり端部は、内傾するものと、凹部をもつものがある。(26~31)

杯身C…口縁部径は10.0cm前後と、一段と小さくなり、底部は、丸くなる。たちあがりは内傾し、端部が段状・凹部をなすものが多い。出土例の約半数は、これに属する。(32~43)

へら削りの方向は、約1:2の割合で、時計回りのものが多い。口縁部径の平均値は、12.46cmである。

杯蓋 杯蓋A…天井部は平坦で、稜は明確である。器高は低い。口縁端部は、内傾もししくは凹部をもつ。杯身Bに対応する(12~15)。

杯蓋B…天井部は丸味を帯び、器高がAに比して高くなく、稜はにくくなり、口縁端部は、段状を呈するものもある。杯身Cに対応する(16~23)。へら削りの方向は、約2:3の割合で、時計回りのものが多い。口縁部径は、約12cmである。

杯蓋C…天井部の中央部が突出した形状を呈する。これは、天井部のへら削りが、横側から始まり、中央部で終っていることに起因する。概して口径は大きく、器壁は薄い(22)。

無蓋高杯 四方透し(50・51)と、三方透し(49)がある。(51)は、突線を2条配し、その下位に波状文を施す。口径が大きく、杯部腹部は、ゆるやかなカーブをもつ。(50)は、突線が段状に変わり、杯部は浅くなり、杯部底部付近から脚部外縁の全面にカキ目調整を施している。脚端部には、二条の凹部をもっている。脚部は長くなりつつある。

有蓋高杯 有蓋高杯(60)は、幅の狭い方形の透しを三方にもつ。口縁端部

は、内傾する面をもつ。(9)は、(60)よりも幅の広い方形の透しを二方に配し、脚端部に一一条の凹部を施す。杯部が浅く、三角形の透しをもつと思われるタイプが1点出土している。脚部に円形透しをもつものが、若干出土している。

變形土器 小型(7)と中型(8)のものがある。(59)は二条の突帯の間に波状文をもつ。(7)の口縁内面に顕著な凹部をもつ。(8)の肩部内面は、タタキ目をていねいに消してあり、口縁直下に一一条の突帯をもち、口縁断面はコ字形を呈する。變の溝内での出土率は、10%前後で、遺物全体の中でも、ほぼ同一である。

壺形土器 短頸壺が1点出土している(6)。最大径部に凹線をもつ。

器台形土器 器台は、SD01とSK09から1点づつ出土している。いずれも小片である。波状文は、細かく弱い。突帯は丸味を帯びている。

Ⅱ) 土師器 土師器は、出土遺物の約30%を占める。器種としては、大型變、小型變、碗、盤などがあげられる。各個体とも胎土にはクサリ跡を多く含んでいる。

大型變形土器 大型變は、溝内から約4個体、土塙から2個体分の復元完形品が出土している。いずれもやや胴が長い。外面はハケ目、内面はヘラ削りを施し、ナテ調整で仕上げている(51)。

小型變形土器 小型變は、器高が15cm程度の小型のものである。調整は、大型變のそれと同一である。

(52)は口径10cm器高5cmを測る。同様のものが2~3個体出土している。盤は完形品ではなく、把手を含む上半部が1個体出土している。

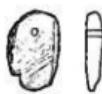
製塩土器 製塩土器は、SD01から約30片程度の製塩土器が出土している。いずれもチップ状のものである。器壁は2~3mmの淡灰褐色の破片である。

滑石製品 滑石製品は、包含層から滑石製劍形模造品が、1点出土している。

Ⅲ) 市内の同時期の遺跡 ほぼ同時期の遺物、遺構が検出されている遺跡は、現在市内で5ヶ所発見されている。まず八部郡内では、当遺跡から西へ0.9kmに所在する神楽町遺跡において、平安時代の遺物と混在した状況で、TK23型式併行期の須恵器・高杯などが、数点出土している。

東隣の菟原郡では、郡家大蔵遺跡の下層で、当該期の柱穴群と祭祀土塙(滑石製臼玉25個以上を含む)や滑石製勾玉模造品が、検出されている。TK23型式に先行すると思われる。

次に東播地方に属する明石川流域では、吉田南遺跡で、相当量が出土している。須恵器は、TK216型式以降の各型式のものが、溝・竪穴式住居から出土している。この東0.5kmに所在する新方遺跡でも、



0 2 cm 滑石製品

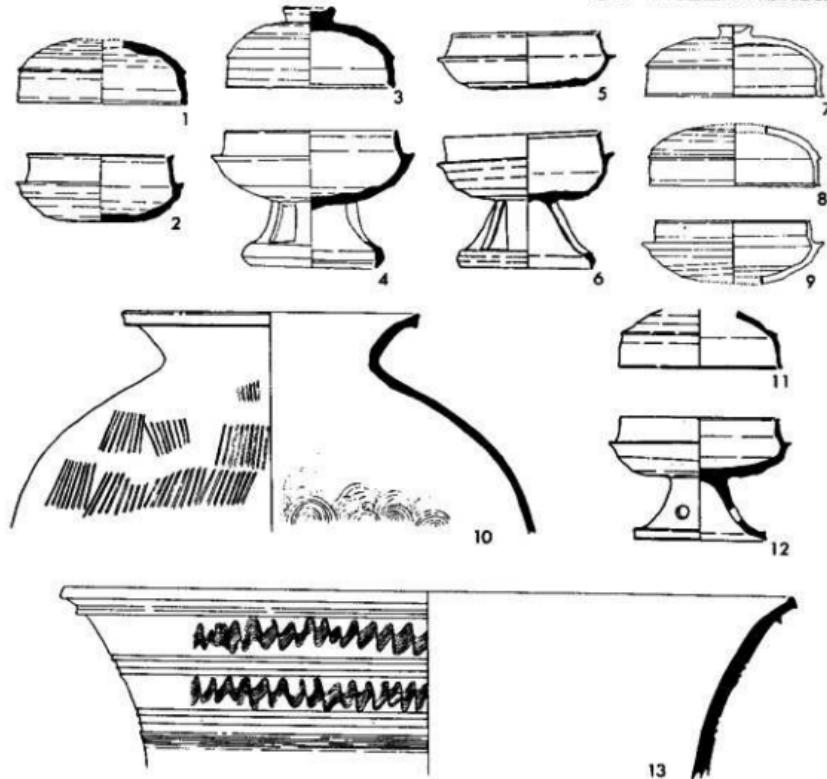
Ⅲ) 市内の同時期の遺跡

TK23型式に先行する竪穴式住居址が検出されている。この住居址からは、須恵器高杯・杯と共に、多量の滑石や、グリーンタフなどを石材とする管玉、臼玉、勾玉の各工程の未製品が、出土している。

この新方遺跡から北へ約2kmの居住遺跡では、自然河川から、TK208型式に相当すると思われる器台、甕などが出土している。

以上5遺跡の出土の須恵器は、中村氏編年の中第1期に属するが、すべてが陶色産であるとは認めがたい。少なくとも第4段階頃には陶色以外の供給ルートが当地域において確立していたと推定される。しかし、生産地を含む供給源の解明は、現在確認される資料の限界を越えている。

fig.26 市内出土第1期須恵器



1~4 吉田南遺跡(現地説明会資料V 1980)
 5・6 神楽遺跡(1980年調査)
 7~9 新方遺跡(現地説明会資料 1982)

10~12 郡家中町遺跡(1981年調査)
13 居住遺跡(1982年調査)

第IV章 まとめ

この地域は、早くから市街地化されていたため、松野遺跡は、まったく周知されていなかった。近年地下鉄工事などに伴う調査で、市街地化されたところからも、遺跡が発見されている。現在の建物の下に眠っている遺跡が存在していることを、ここでも証明したことになる。今後とも、市街地化された地域の再開発に、十分注意を払う必要性を、教えてくれた遺跡の発見でもあった。

試掘調査を始めとして足かけ6ヶ月に及ぶ発掘調査の結果、柵に囲まれた掘立柱建物群の整然とした姿が、我々の前に現れてきた。

木葉文七器も出土しており、周辺には弥生時代前期の集落も、当然存在すると推定される。また弥生時代後期の遺構は、今回の調査区では削平されていたため、集落の規模や性格については不明である。しかし近接する神楽町遺跡でも、同時期の遺物が検出されていることから、かなり広範囲に渡って弥生時代後期の集落が微高地に存在していたと想定される。

掘立柱建物群 近年、古墳時代の掘立柱建物址は発掘例が増加しており、また内容的にも集落等の構造把握が可能な例がみうけられる。当遺跡と共に点をもつ遺跡としては、大阪府大間遺跡、群馬県三ツ寺遺跡、同原之城遺跡、和歌山県鳴滝遺跡等が注目を集めている。これらは、5世紀前半～6世紀初頭と考えられる掘立柱建物址群であるが、立地・出土遺物・構造の点で各々特色をもっている。

今後も、これら諸遺跡に対して多角的な種々の論議が展開されると思われる。

遺跡の広がり 当遺跡はまだ調査区外へ広がっており、今後周辺地への発掘調査によって、この地域の重要性が増々明確になっていくであろう。

今回の発掘調査によって得られた多くの資料を、より厳密に検討し、それを有効に活用することが急務である。まだ検討の途中であるが、とりあえず事実関係をここに報告する。この小冊子が今後この地域を明らかにする作業の一助となれば幸いである。

註

- ① 広瀬和雄「古墳時代の集落類型—西日本を中心として」『考古学研究』第25巻第1号 1978、丹羽佑一「大間遺跡における古墳時代中期後半の建物群の構成」『奈良大学紀要』第10号 1981

松野遺跡の高床建築について

奈良国立文化財研究所 宮本長二郎

松野遺跡は、この遺跡の属する古墳時代後期に限らず、高床建築を移入した弥生時代以降、奈良時代にいたるまで、この種の造構が極めて少ないところに、この遺跡のもつ特殊な性格を窺わせる。

この遺跡の最も特微的な点は堅穴住居1棟を除いて全て総柱の高床建物であることである。岡山市百間川遺跡（弥生時代中期）は18棟以上の建物が、全て高床式と推定され、時期は異なるが、同一系統の集落造構として最も古い例である。両遺跡の造構平面を比較すると、百間川遺跡では梁間は全て1間で、桁行2～3間が主であり、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて同種の造構と、静岡県登呂・山木遺跡に代表される高床建築部材の出土例が認められる。

松野遺跡のように梁間2～3間の総柱建物は現在までのところ弥生時代には確実な例がなく、古墳時代に始まった形式であろう。現時点での最も古い造構例は、和歌山市鳴滝遺跡で、桁行4間、梁間3間の総柱建物7棟が発見され、出土遺物からは5世紀前半に限定されるものである。しかし、この平面形式は、屋根支持用の柱と床支持用の柱を使い分けた構造的に過渡的な手法を示すものと考えられ、いわゆる総柱の高床建築造構は、松野遺跡の造構例以下、古墳時代後期に入って造構例が全国的に増加したものと云えよう。

次に、総柱建物がどのような構造形式をもっていたかについて、埴輪家等の古墳時代の遺物および、現存の神社建築造構を参考にして復元を試みてみよう。

伊勢神宮、出雲大社、住吉大社の各神殿の建築様式は古代の伝統を繼承するものとされている。いずれも、造替を繰り返す間に規模や細部形式に若干の変更が加えられているが、他の多くの神社建築が、仏教建築の影響を受けて徐々に変化したのに較べると格別に古い形式を留めるものと認めることができる。これらの本殿建築に共通の特徴をあげると、いずれも総柱高床建築であり、側柱が直接軒桁を支え、高床部は長押で固め、柱間に柱側面に小穴を突き、上から横板を落し込んで壁面を造る。異なる点は、伊勢神宮本殿は棟持柱が独立して直接に棟木を支え、出雲大社本殿は妻中央柱が棟持柱となり、住吉大社本殿は棟持柱を持たない形式である。伊勢外宮

御饌殿では、総柱上に台輪を組んで床を張り、映面は台輪上に板校本を組む板校倉形式をもち、本殿の形式よりは古式とされている。

古墳時代の家型埴輪には上記の各本殿と同様に太い円柱で直接側桁を受ける高床建築がある。大阪府玉手山古墳出土家型埴輪（4世紀後半～5世紀初頭）は桁行2間、梁間2間で、桁行側柱を通し柱とする。妻側中央柱は床下部のみ円柱とし、床上部は細い角柱で棟木を受ける。高床部の四辺に巡らせた鼠返しは、現存校倉造りの台輪と形状は似るが、構造的には通し柱との関係から長押とみなすべきもので、前記本殿と同形式と云うことができる。近年出土例では大阪府長原遺跡にも同種の高床埴輪家がある。

埴輪家以外では、奈良県佐味田宝塚古墳出土上家屋文鏡（4世紀）の入母屋屋根高床家がこの種の建物のもつ機能的な性格を最も良く表現しているものと云えよう。

以上のような遺構・遺物からみて、総柱建物の場合の構造形式には、通し柱・横板壁形式と板校倉形式の二種類がある。前者は祭式・招宴・望樓等の機能を備えた公共性の強い建物に、後者は穀物収納倉などのような附属的な建物として、埴輪家では切妻造り屋根の小建物に表現される例が多い。

したがって、松野遺跡の各建物址について、その建築形式と性格について上記の例にあてはめて考えてみると、建物の配置形態や規模の点から、SB05、06は通し柱・横板壁形式に、他は板倉形式に比定することができる。SB05は現時点では棟持柱を持った高床建築と確認できる唯一の遺構であり、また、建築的に伊勢神宮本殿の相型とも云える形式をもつ点から（出土遺物の点で問題はあるが）、神殿的な性格の建物である可能性を与えて良いであろう。

SB06は、東側面の小柱穴列を覆台東柱痕跡とみると、家屋文鏡の高殿と同一形式のものと考えられ、祭式儀礼に際して主宰者の居所であり、直会殿ともなったであろうか。

神殿と高殿を中心に建並べて四周に柵を囲う有様は、まさに「魏志倭人伝」に所載の「一宮宮櫻觀城柵設一」の状況を示すが、常の生活の場は遺構の配置状況からみて発掘以外と考えられる。Ⅰ期の匂いは大きく一重柵であるが、Ⅱ期には区画を狭くして、西方を除く三辺を二重柵として、豊穴住居と高床建物を内柵外に置いている。あるいはこれら2棟はⅡ期に増築したものかも知れない。このような柵を囲う例としては、群馬県三ツ寺遺跡の豪族館跡があり、遺跡の性格や柵の構造は異なるが同時期の類例と云えるであろう。

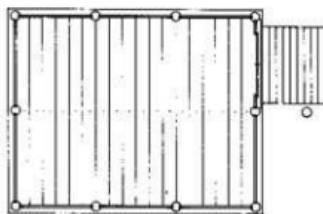
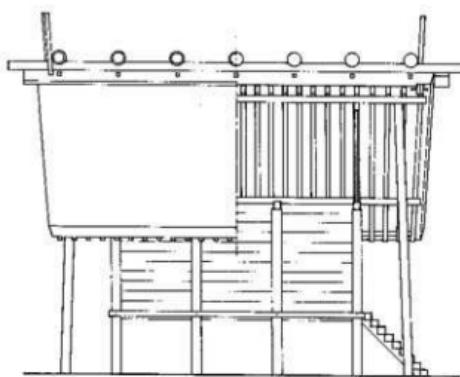


fig. 27 SB05復元図($S=1:20$)

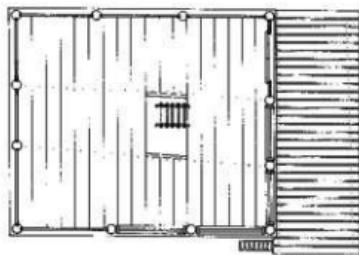
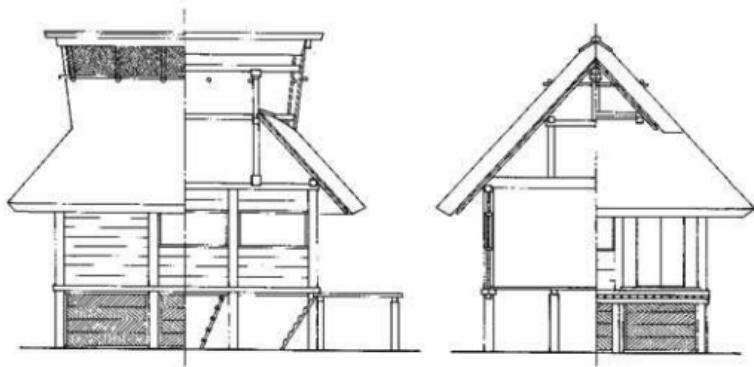


fig. 28 SB06復元図(S=h20)

松野遺跡より出土した杭材の樹種について

元興寺文化財研究所 松田隆嗣

1. はじめに 松野遺跡より出土した木製造物の樹種鑑定を依頼により行った。遺物は柱根（6点）と流木（1点）である。

木製造物のなかでも、柱根の樹種鑑定データーはまだ少くなく地城・時代などによりどのような相違があるのかも明確ではない。

2. 同定方法 遺物から木口・柱口・板面の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。これらの切片を永久プレパラートに仕上げたのち、材の解剖学的性質を顕微鏡により観察を行い同定を進めた。

3. 同定理由 材が確認された資料は次の2種である。

針葉樹

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.*
(スギ科 Taxodiaceae)

垂直・水平樹脂道とも存在しない。春材から夏材への移行はゆるやかである。材は仮道管・放射柔細胞よりなり、樹脂細胞・放射仮道管を欠く。分野壁孔は窓状壁孔である。

広葉樹

カシ *Quercus spp.* (ブナ科 Fagaceae)

遺跡から発掘される木製造物のなかでも、杭・柱根類に用いられている材の樹種に関する報告は少なく、その利用状況については不明な点が多い。一般的な傾向としては、柱根に利用されている用材が地城・時代により樹種に変化が認められるという点である。

つまり、弥生時代の遺跡から発掘される柱根の大半は、広葉樹が選択されており針葉樹の利用が極めて少ないことが、近畿地方においては認められる。また、利用されている広葉樹材も手近にあった樹木を無差別に用いたのではなく、ある程度の選択を行って用いていたようである。

しかし、時代が新しくなるに従って利用されている用材は広葉樹から針葉樹に移って行くのは明らかであるが、この移行がいつ、どのように始ったかを明らかにするには現時点では資料が少なく明確にすることは困難である。しかし、今回、明らかとなった松野遺跡の結果から見るかぎり、近畿地方においては古墳時代に針葉樹への移行が始まっていることが明らかとなった。また、用材もコウヤマ

キが選択されている点は、その後の時代の用材の選択傾向とも一致している点は興味深い。

ただ、このような針葉樹の利用が広く一般に行なわれていたか、特定の建築物についてのみ行なわれていたかは、資料が少なく、これも、今後に残された問題の一つである。

肆

- ① 鳩倉巳一郎「瓜生堂遺跡から出土した木製品の樹種」『瓜生堂遺跡Ⅲ』P.325~330
1981

② 鳥地謙・伊東隆夫・林昭三「古代における宮殿・官衙の使用樹種」『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究—括弧報告書一』P.249~260 1980

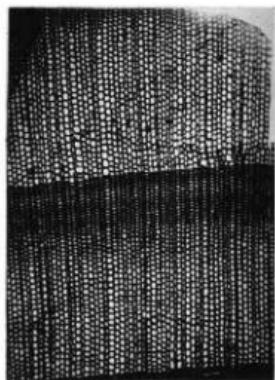
表-1 柱根の用材

a. <i>Taraxacum</i>	i. <i>Sisymbrium</i>
b. <i>Polygonum</i>	g. <i>Cryptomeria</i>
c. <i>Aster</i>	h. <i>Chenopodiaceae</i>
d. <i>Vitis</i>	j. <i>Osmunda</i>
e. <i>Rubus</i>	k. <i>Cyperaceae</i>

表-2 指標—智表

遺物	出土地点	樹種
柱根	A-1, Pit 4	コウヤマキ
柱根	A-1, Pit 3	コウヤマキ
柱根	J-7, Pit 1	コウヤマキ
柱根	J-7, Pit 2	コウヤマキ
柱根	K-11, Pit 1	コウヤマキ
柱根	C-1, Pit 3	コウヤマキ
流木		カシ

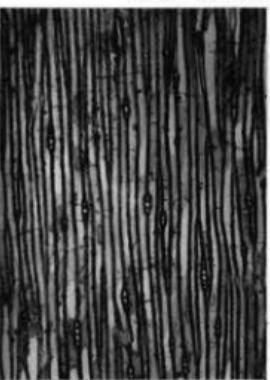
fig.29 樹種写真



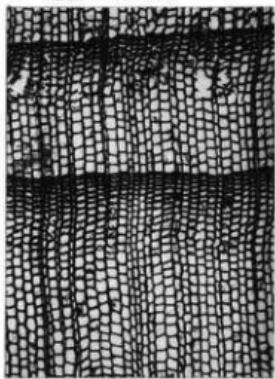
1. コウヤマキ
(柱根. A-1, Pit4)



R-200X



T-50X



2. コウヤマキ
(柱根. J-7, Pit2)



R-200X



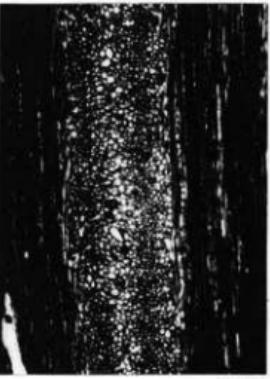
T-50X



3. カシ
(粗木)



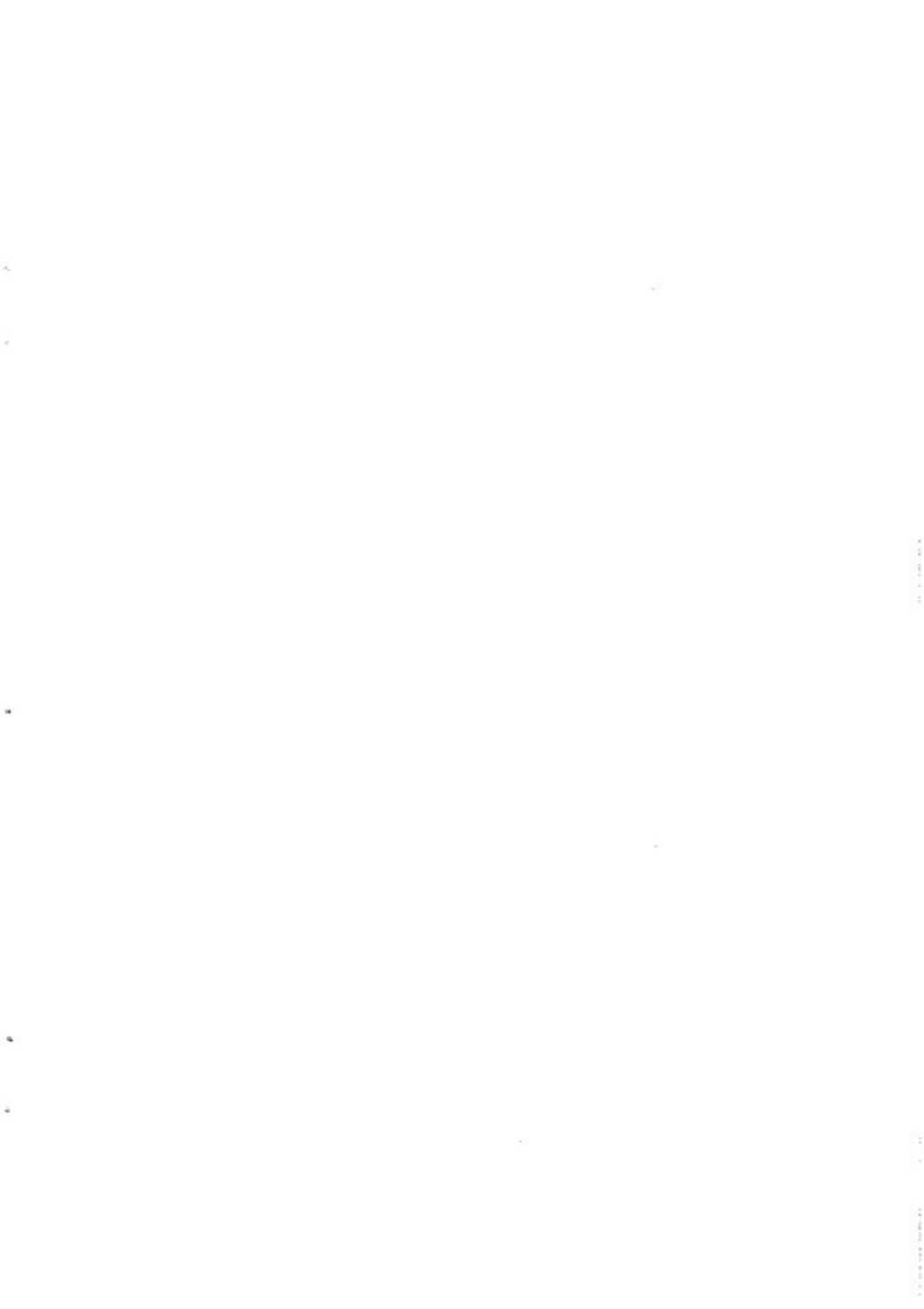
R-100X



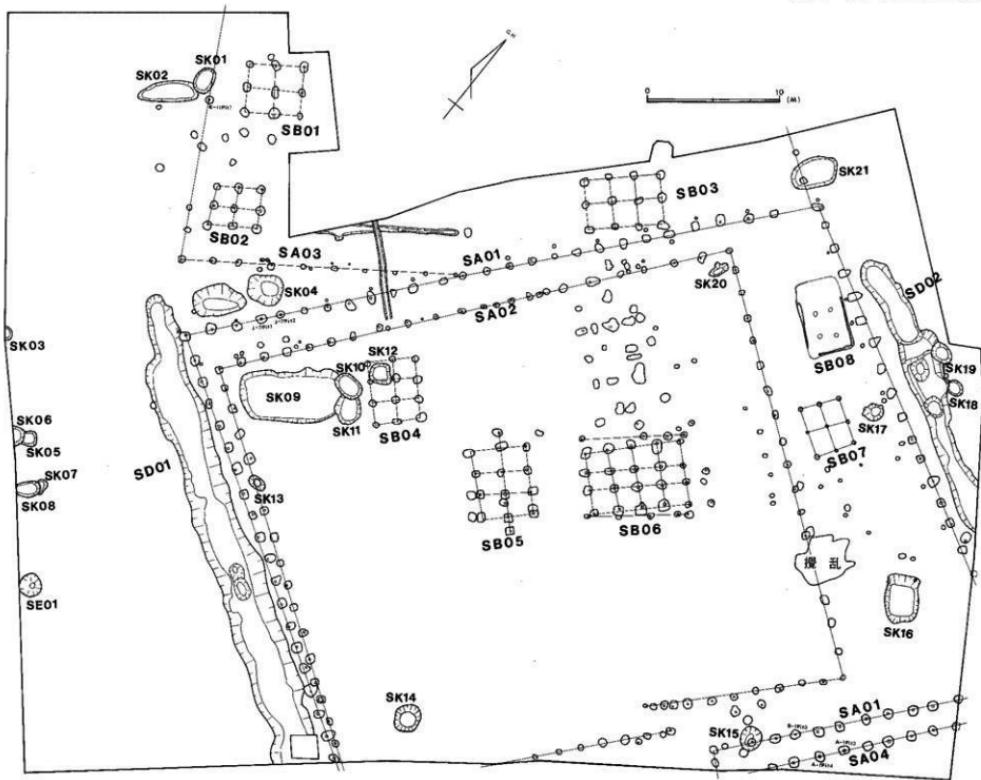
T-50X

C:木口面, R:柱面, T:板面を示す。後の数字は写真的倍率を示す。

図 版



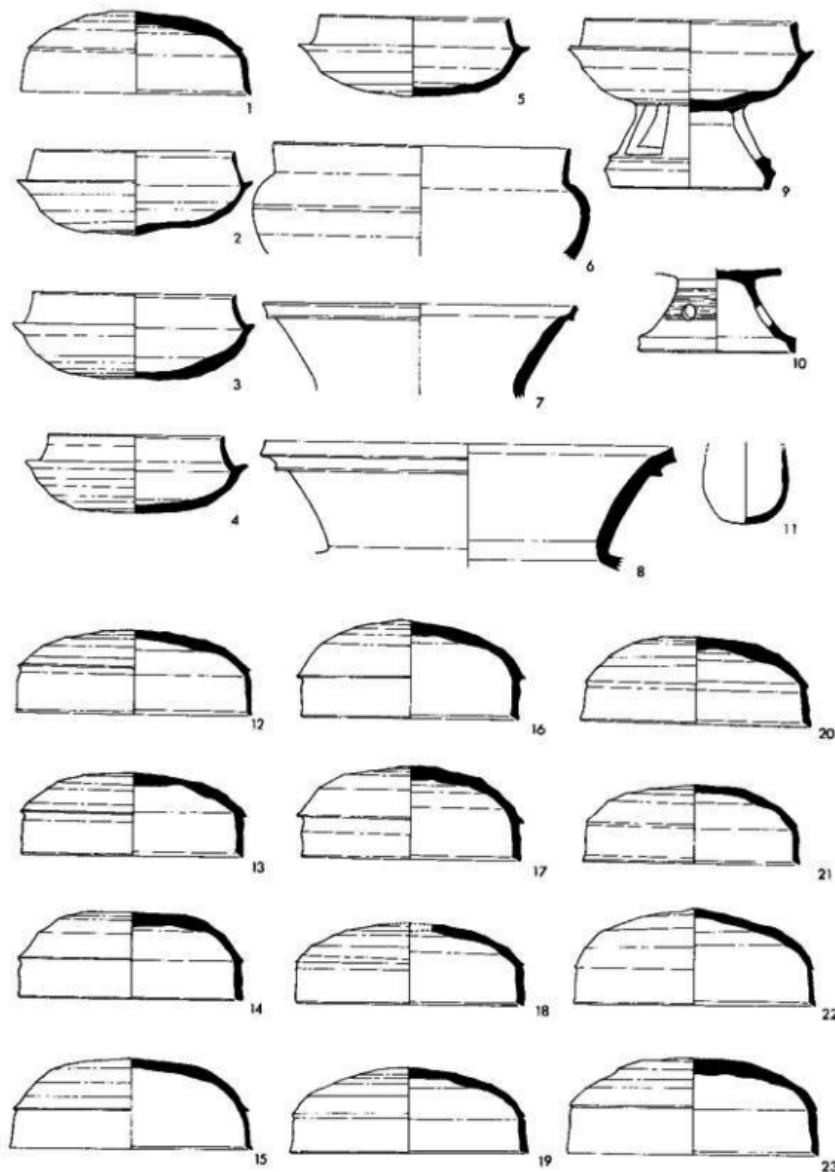
PL. I 第1 トレンチ平面図



橋推定規模

	北 边	南 边	東 边	西 边
SA 0 1	49.0	(51.0)	(41.3)	(42.0)
柱間距離	1.7~2.0	1.5~2.0	2.0	1.7~2.0
SA 0 2	39.6	38.5	33.5	33.8
柱間距離	1.7, 2.0, 2.3	1.5, 1.7	1.7, 2.0	1.7, 2.0
SA 0 3		20.8	4.4以上	12.4
柱間距離		2.0, 2.4	2.2	1.7, 2.3

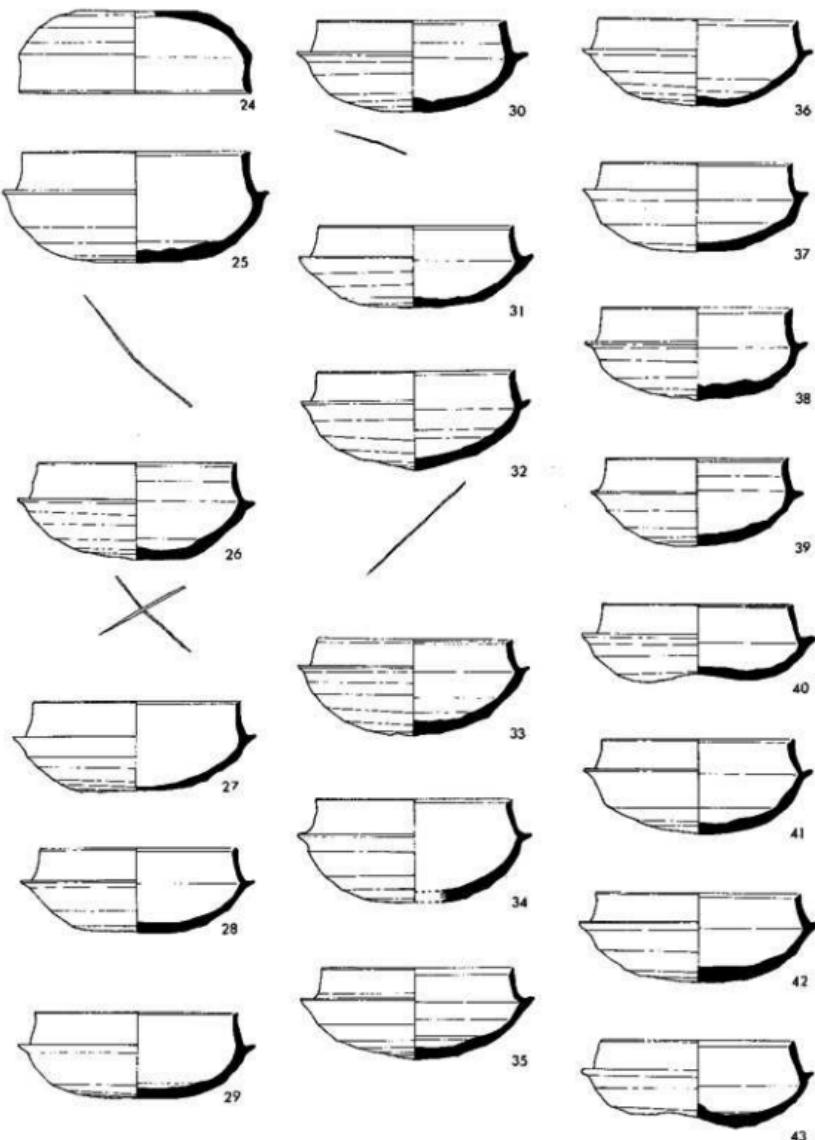
()は推定 単位m



1~11.....SD01 12~23.....SD02

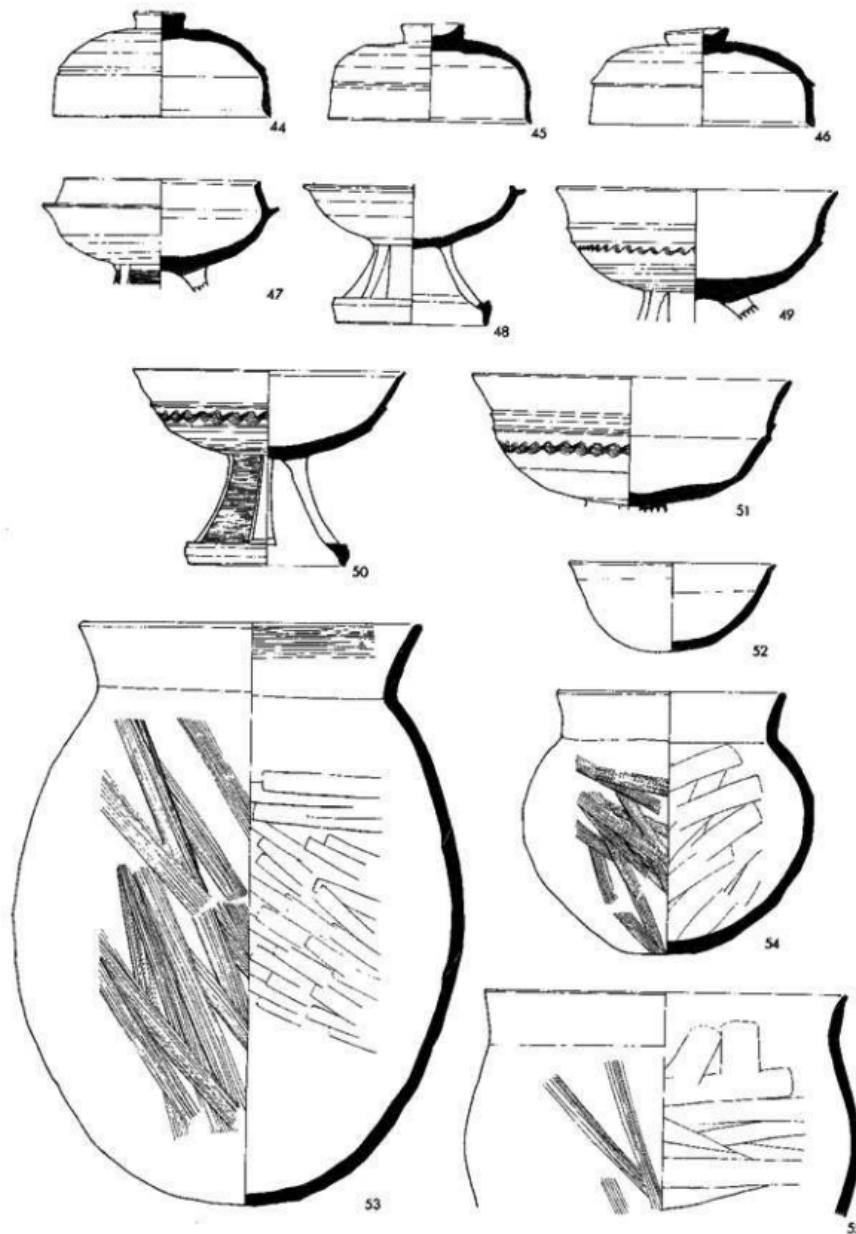
(S=1/2)

PL. 3 遺物実測図(II)

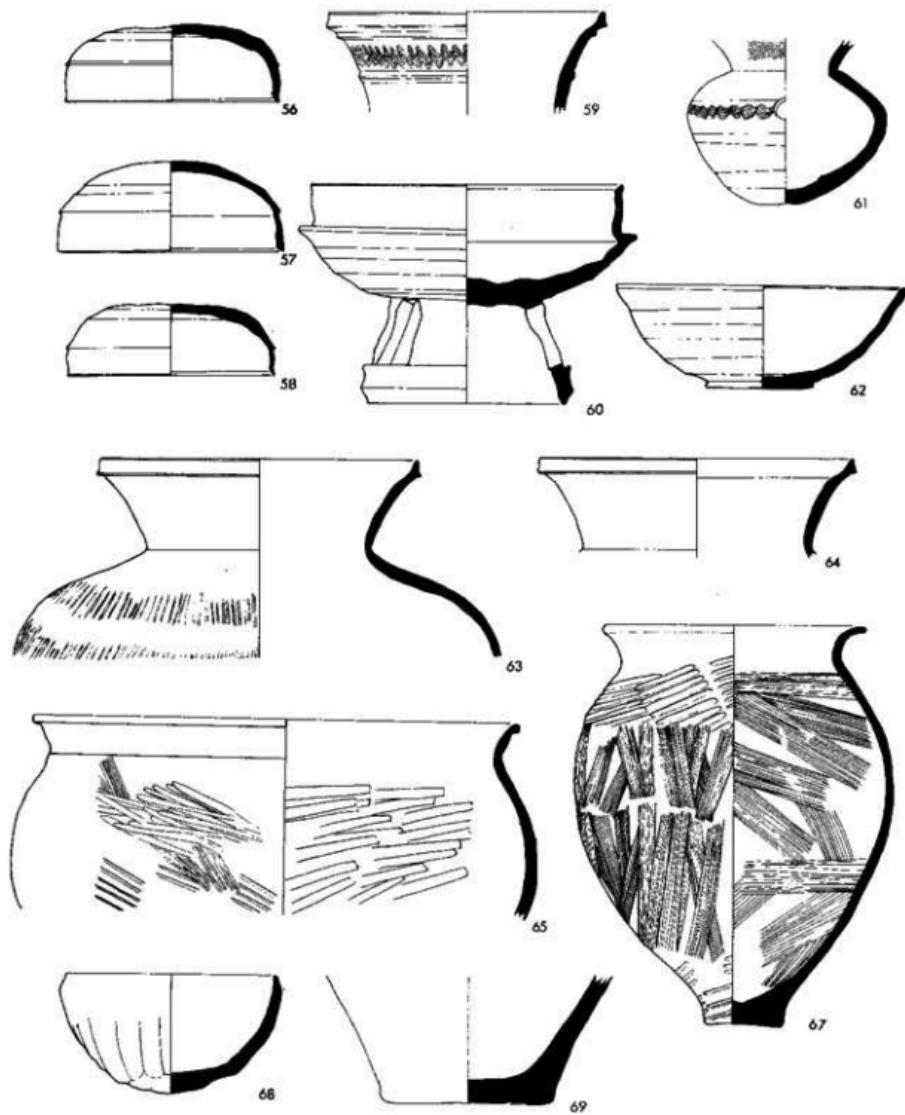


24~43.....SD02

(S-1/2)



PL. 5 遺物実測図(IV)



(S-1/2)

- | | | |
|-------------------|--------------------|-----------------|
| 56.....SK03 | 56, 60(S-1/2)-SK04 | 57.....SK08 |
| 58.....SK15 | 65, 67.....SK17 | 53, 64.....SD02 |
| 59, 68, 69....包含層 | 62.....苔 土 | |



1



35



2



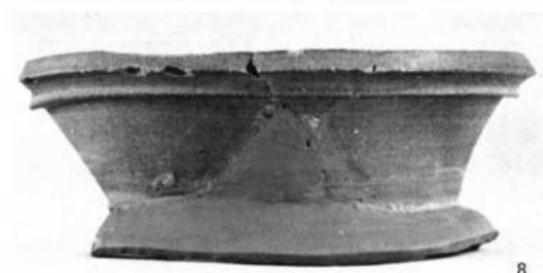
14



6



16



8



10

(S-½)

PL. 7 出土遺物(II)



20



39



22



29



24



38



25



33

(S-½)



45



46



60



50



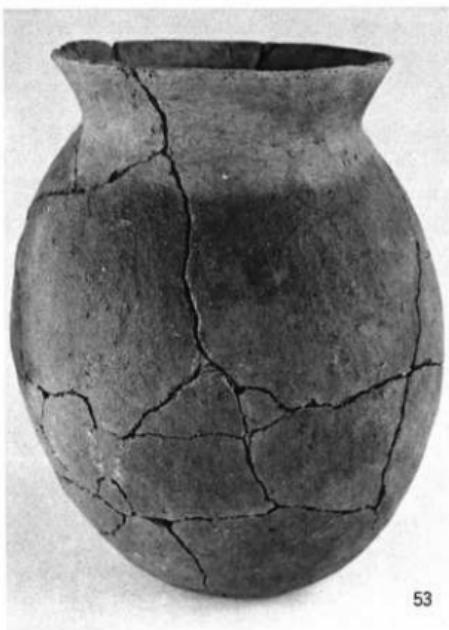
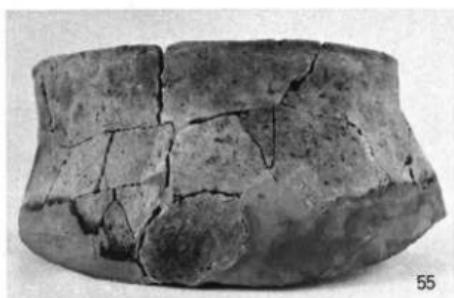
61



51

(S- $\frac{1}{2}$)

PL. 9 出土遺物(IV)



(S- $\frac{1}{2}$)



第1トレンチ第2次調査全景(西から)



第1トレンチ柵内(西から)

PL.11 遺構(II)



第1トレンチSD01(北から)



第1トレンチSA01, 02北辺(西から)



第1トレンチSA02東辺(南から)



第1トレンチSA02東辺(北から)

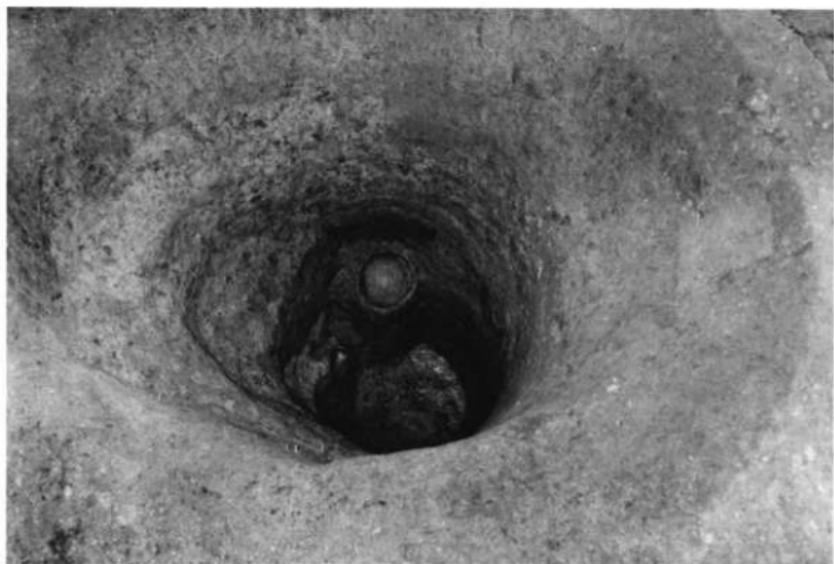
PL.13 遺構(IV)



第1 トレンチSB05, 06(西から)



第1 トレンチSD02(北から)



第1トレンチSE01



第1トレンチSK20



松野遺跡発掘調査概報

1983年3月25日 印刷

1983年3月31日 発行

発 行 神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町67丁目5番1号

印 刷 株式会社 便利堂
京都府中京区新町通竹屋町南人
